名古屋が生んだヴァイオリン王 鈴木政吉と

近代酵素学の創立者 レオノール・ミハエリス――知られざる出会い

愛知県立芸術大学音楽学部　井上さつき

【略歴】
1979 年　東京藝術大学音楽学部楽理科卒業
1982 年　パリ＝ソルボンヌ大学音楽・音楽学科修士課程修了
1986 年　東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程、博士課程を経て、常勤助手
1989 年　愛知県立芸術大学一般学科常勤講師
1994 年　同大学音楽学部助教授
2004 年　同教授、現在に至る
　この間、博士（音楽学）の学位を取得。専門は近代フランス音楽史および近代日本の洋楽器受容史

〔主な著書〕
『パリ万博音楽案内』音楽之友社 1998、『音楽を展示する――パリ万博 1855-1900』法政大学出版局 2009、『フランス音楽史』（今谷氏と共著）春秋社 2010、日本のヴァイオリン王――鈴木政吉と幻の名器』中央公論新社 2014

１．鈴木政吉とは？

鈴木政吉(1859 - 1944)は日本の洋楽器製造の草分け的な存在である鈴木ヴァイオリンの創設者である。父、正春は尾張藩の下級武士で、内職として三味線を作っていたが、明治維新後はそれが本職となり、政吉もその後を継いだ。彼は 1887（明治 20）年、生れて初めてヴァイオリンを目にし、見よう見まねで翌年はじめに第１号を完成させ、ヴァイオリン製造へと身を転じた。1890 年、第 3 回内国勧業博覧会にヴァイオリンを初出品し、3 等有功賞を獲得。それをバネにさらなる飛躍を試み、さまざまな国内外の博覧会での受賞を通じて、その地位を固めていった。分業制によるヴァイオリンの工場生産をいち早く実現し、明治 30 年代には国内 8 割のシェアを持つようになった。ヴァイオリンを簡便な西洋楽器、庶民の手に届く西洋楽器として大量生産を始めたのである。

第一次世界大戦中、それまでの主要なヴァイオリンの輸出国であったドイツから輸入が出来なくなった国々は、極東の日本に楽器を求めた。鈴木ヴァイオリンの工場には世界中から注文が殺到し、好調な輸出に支えられて、政吉は事業を急激に拡大していった。

大正末年、ベルリンにヴァイオリンの勉強に行っていた政吉の三男、鈴木鎮一（スズキメソード創立者）がクレモナの古銘器グァルネリを持って、一時帰国する。極度のインフレのために生活に困っていた婦人から買い取った楽器だった。政吉はこの楽器を手本に高級手工ヴァイオリンの製作に乗り出し、「ヴァイオリン製作家」としてすぐれた手工楽器を作るようになった。こうして作られた政吉の高級手工ヴァイオリンは国内外で高い評価を得た。政吉は最晩年まで楽器の製作に没頭し、太平洋戦争末期の 1944（昭和 19）年、長い生涯を閉じた。

２．名古屋のミハエリス

第一次大戦後、日本のいくつもの大学が深刻なインフレに苦しむドイツ・オーストリアから学者や医者を招へいした。なかでも愛知医科大学（現名古屋大学医学部）はドイツのベルリン出身の世界的な生化学者・医師のレオノール・ミハエリス〔ミカエリス〕(Leonor Michaelis 1875-1949)に白羽の矢を立てた。1922（大正 11）年 10 月 1 日に愛知医科大学の生化学講座教授に就任したミハエリスは日本の生化学の発

展におおいに貢献した後、1926（大正 15）年にアメリカのジョンズ・ホプキンス大学に移り、残りの生涯をアメリカで過ごした。

ミハエリスは世界的な生化学者であると同時に、卓越したピアニストでもあり、その演奏は専門家の域に達していた。物理学者のアインシュタインが訪日した際、名古屋を訪れたときには、アインシュタインのヴァイオリンと合奏している。また、鈴木政吉の三男鎮一が留学先のベルリンから一時帰国したときには、名古屋のコンサートで鎮一の伴奏をしている。

こうした縁で、ミハエリスはベルリンの友人であるアインシュタインに鈴木鎮一を紹介したのだろう。鎮一はアインシュタイン家に出入りするようになり、大きな影響を受ける。さらに彼は 1926 年末、父政吉が手作りで作ったヴァイオリンをアインシュタインに届けに行っている。

ミハエリスはこのときアインシュタインに贈られた政吉の楽器について、アインシュタインに宛てて、アメリカから次のように感想を尋ねている（1927 年 1 月 25 日付）。

> 私たちの若い友人、スズキサンが、あなたのお宅を訪問したことを知りました。私は、彼が持って行ったヴァイオリンについて、あなたの本当の意見――日本的礼儀正しさで金めっきされたものではないもの――を聞きたいです。スズキ翁（Der alte Suzuki）はとても興味深いです。古風な純正日本人です。彼は 40 年来楽器の中で、もっとも日本的でない楽器を作り続けているにもかかわらず、西洋音楽を少しも理解しません。それなのに、ヴァイオリンの音色を判定する際にはとても力量があるのです。

名古屋で鈴木政吉たちと親交があり、しかも音楽的な素養があったミハエリスならではの貴重な証言である。彼は政吉が西洋音楽をまったく理解しないにもかかわらず、ヴァイオリンの音色に関しての耳は確かなものである、と書いている。この手紙に対して、アインシュタインがどのように答えたのかはわからないが、彼らが聴いたであろう政吉の高級手工ヴァイオリンの音色をこれからお楽しみいただく。

３．鈴木政吉の 1929 年製手工ヴァイオリン（現愛知県立芸術大学所蔵）について

政吉が精魂込めて作った、円熟期の手工ヴァイオリンは現在ほとんど残っていないが、その数少ない一つが今回演奏される、松浦正義氏から愛知県立芸術大学に寄贈された 1929 年製のヴァイオリンである。この楽器にはヨーロッパ産の高級な材料が使われ、素晴らしい技術で作られている。

○ヴァイオリン独奏　江頭摩耶

〔演奏者プロフィール〕
名古屋市立菊里高等学校音楽科を経て愛知県立芸術大学音楽学部を卒業。
桑原賞、中村桃子賞を受賞。2008年にフィンランド国立シベリウスアカデミーを最優秀の成績で卒業。これまでに、クオピオ市交響楽団首席奏者、ラハティ市交響楽団第二ヴァイオリン奏者、シベリウスアカデミー非常勤講師(以上フィンランド)、ポルト・カサダムジカ交響楽団(ポルトガル)第二コンサートマスター、愛知県立芸術大学非常勤講師などを務める。ゲストコンサートマスターとしてヨーエンスー市交響楽団、オウル市交響楽 団(以上フィンランド)、ノールランドオペラ(スウェーデン)などに客演。ヴィオラ奏者としても室内楽を中心に精力的に活動している。

〔演奏予定曲目〕
１．J.S.バッハ：パルティータ第 3 番ホ長調 BWV1006 から〈ロンド形式のガヴォット〉
２．鈴木鎮一：名古屋の子守唄
３．N.ミルシテイン：パガニーニアーナ